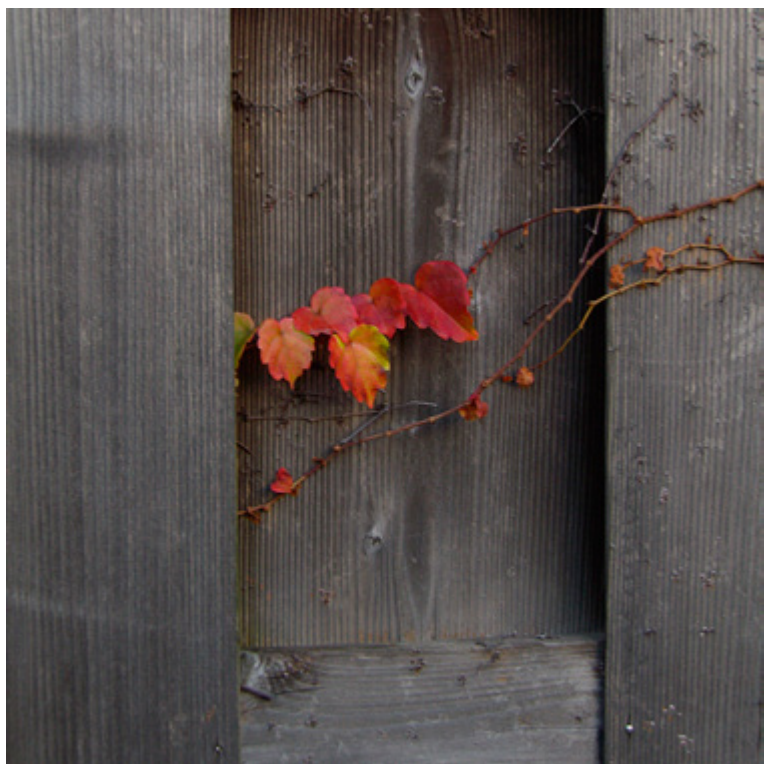


あを 12

2015



武 甲 山

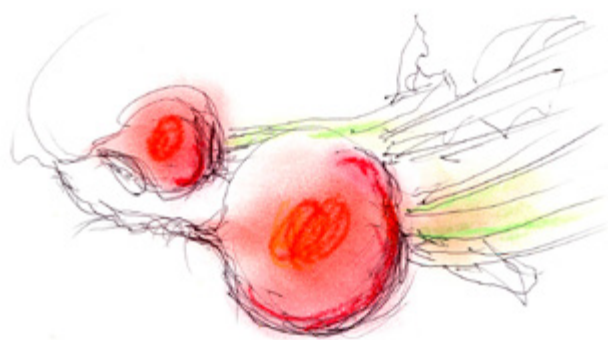


呼称 ぶこうざん
標高 1,304m

武甲山被ふばかりの冬花火	松本米子
ゆったりと霞の上の武甲山	須賀敏子
雲の峰武甲に近く来たりけり	々
芝桜真正面に武甲山	々
冠雪の武甲眩しく遍路道	々
五月鯉五匹揃って武甲山	々
山粧ふ武甲の嶺のまた狭く	々

あを

十二月



金魚鉢の水かきわけて八月
月もやや歩をゆるめたところなり
この風を覚えてをりし葉鶏頭
大江戸線から首^{かしら}出したる十三夜
原子爐のうへを通ひて鴨來る

月

佐藤喜孝

虫

長崎桂子

虫鳴やそろりと腰を上げてゆく
虫すだく宵を歩めば懐かしき
青あをと草育ちゐて昼の虫
悪天候にめげず揃ひぬ曼珠沙華
名月や災害の加減なぜ出来ぬ

薩摩芋根を出す方と葉を出す方
雨戸開けぼとりと守宮南無阿弥陀
蛭草わきに守宮を葬むれり
竹林の竹に巻き付く牽牛花
秋の蚊の刺す気あるのか無いのかな

秋の蚊

森 理 和

隼人瓜

赤 座 典 子

御代りと葡萄の器捧げをり
月天心ぽっかり新興住宅地
ハロウィンといふ馴染めぬ行事後の月
突抜けるカノンの調べ秋の暮
豆粒も拳も揺れる隼人瓜

鴿の目とかの子一平太郎の目
しどけなく開きてをりぬ捨扇
蚯蚓鳴き禁じ手つかひ法案成す
地下鉄を出づれば広く曼珠沙華
ひと知れず祈りの行者九月尽

眼をひらく

秋 川 泉

☆

井 上 石 動

安曇野の少女色なき風の中
月見草風ほそき日も開きけり
武者振るふ益荒男美しきラガーかな
しのび入る木犀の香や部屋ゆふべ
葛咲くやかたつて甲斐より絹の道

朝ごとに愛を囁く小鳥来る
登り来し道は何処に山紅葉
岩ガキを求め三陸雨ざんざ
愛を断つ縁切寺や鰯雲
水平に泳ぐアメン坊水均す

愛を断つ

大日向幸江

曼珠沙華

斉藤裕子

父の背にしよはれし記憶曼珠沙華
自問自答叱咤激励曼珠沙華
癌だとして生きるは楽し曼珠沙華
生きるとは信じる力新松子
ひと言の返信嬉し秋日和

秋の庭

七郎衛門吉保

地下鉄の蜘蛛の囀る秋
月明り赤児のまなこ黒水晶
床几置き月下美人の一夜かな
青天に柘榴ぼたりと絵具垂れ
椿の実弾けて飛んで豹柄に

おほぞらに風がをきゆく鰯雲
柵を抜け出で帰る燕
十三夜横紋筋はそつとそつと
ルイヴィトンがまだ乗つてない着膨車
点々と疲れきつたか紙魚のあと

あきのそら

佐藤恭子

地下鉄の階段下の秋西日
焦螟にニユートリノの重さかな
田中 泯^{みん}の脛^{はざ}腿^{もも} 肋^{あはら}月天心
幼稚園児の声撥ね返る水の秋
9条守れの厚紙よれる秋の雨

☆

篠田純子

稲光

定梶じょう

通夜零時過ぎてし虫の音が元氣
安心の蓑虫糸を長く引く
秋交る猫と洗濯日和かな
閑居するれものの香にも驚いて
油槽船急ぐ頻りに稲光

老犬が老人を曳く秋麗

コツコツと地下鉄を出る良夜かな

屋根のないバスにて秋の銀座かな

秋刀魚には石垣の塩ひとつまみ

秋祭新山車披露旭町

秋麗

須賀敏子

秋の蝶

竹内弘子

石佛にぶつかり落つる木の実なれ

翅とちて石となりゆく秋の蝶

飛脚行く馬籠秋立つ石畳

ポケットに石詰め終り秋の海

稲架組むや郵便船が近づき来

一つ乞ひどさりともらふ隼人瓜
赤とんぼ群れて山から里へくる
山合の一字覆ふ赤とんぼ
野の風を家へ連れきし薄かな
紛争の絶えざる地球鳥渡る

隼人瓜

田中藤穂



十一月作品より

芥藤裕子・佐藤喜孝

武蔵野の月に浮びしけものみち

佐藤喜孝

武蔵野という題がついた作品群。地名のイメージは、時代とともに開発が進み変化するものでしょうが、よく「ここにはまだ武蔵野の自然がまだ残っている」という言い方を耳にします。私の中では武蔵野のイメージは曖昧です。国木田独歩は、都市からそう遠くない人間の生活圏と自然とが入り交じる田園地帯として、「新時代の武蔵野」を描き出そうとしたそうですが、この句はもっともつと遡った時代にタイムスリップしたような武蔵野を詠っているような感じがします。獣道を浮かび上がらせる程に、煌煌と武蔵野を照らす月明かり。武蔵野の空も空気もどこまでも澄み渡っているようで、そこに

浮かぶ大きな月と、月明かりに浮かび上がるけものみちの取り合わせに妖しささえ覚える句でした。（裕子）

強行採決曼珠沙華打つ雨烈し

田中藤穂

最近の政権の数に物を言わせた強行採決には恐ろしいものを感じてしまいます。多数決の原理をふりかざす前に、少数派や色々な意見に耳を傾け議論をする事が民主主義の基本だと思えます。議論を尽くさぬ強行採決は、まさに一生懸命に咲く曼珠沙華に烈しくたたきつける容赦ない雨のようです。曼珠沙華の赤い色が、国民の怒りをも表しているように思えました。（裕子）

引き籠りめく一日に鵪くる

田中藤穂

わたしは近頃用がない限り終日家の中で過す。数日続くこともある。勝手に多忙がつてゐるのである。用があり外に出ると季節の移り変りに驚く。作者にも日の暮れにふと、ああ今日一日家を出なかったなと思ひ返す日があった。ただわたしと違ふのは庭に鵲が訪れるといふことである。わたしの所は朝になつても近ごろは鵲も雀も鳴声が聞えない。鵲さへ見かけない。わたしごとばかり書いてしまった。

掲句の鵲は大切な来訪者である。(喜孝)

山山の合唱付きの蟬時雨

森 理 和

合唱付と聞けば他にもあるのだらうが、壮大なベートーベンの交響曲第九番を想起する。この曲を一枚のCDに納るやうCDの容量が決つたと聞いた。盛夏の大自然を音と映像で描いたユニークな作品。山々が合唱してゐるなら蟬は独

唱では……など野暮な突っ込みは無視して、蟬声とそれを取り囲む山々が口を大きく開け体を揺らしてゐるやうだ。(喜孝)

二才児の脇役であり櫟の実

赤 座 典 子

まだ二才児といえばお母さんにいっぱい甘えていた年頃。でも次のお子さんが産まれ、お兄ちゃんになつたお孫さん。産土参りは赤ちゃんが主役。今までずーっと自分が主役だったのに、今日はどうみても自分は脇役だ。おめでたい産土参りだが、幼いお孫さんを見てるといじらしく、愛おしくなってくる。お孫さんの気持ちに寄り添う典子さんの優しさが伝わってきます。大きい丸い実が毛糸の帽子のような殻斗に包まれた「櫟の実」は、おくるみに包まれた赤ん坊のようでもあり、帽子をかぶつた幼子のようにも思われて、この句にぴったりの可愛ら

しい季語だと思いました。(裕子)

落葉して隅々明るき雑木山

大日向幸江

近くの有栖川宮公園も紅葉が過ぎて、樹々が全部落ちてしまうと空が明るくひらけ、今までは違う景観になります。この句はもっと広い大きな雑木林の山、その隅々が明るくなっているというのです。遮っていた樹々の葉が皆落ちてしまい、日の光が隅々まで届いている。そんな中を散策している作者の、落葉を踏みしめる音まで聞こえてくるような句でした。(裕子)

父呼べば母が応へる刈田かな

斉藤 裕子

句会で読んだとき、「農作業のさなか、夫が妻を呼んだ。妻ががその声に応へる。のどかな田園の一コマとして読んだ。それを子である作者が俳句に詠まれた」といふ句意だと思った。

評後作者の自解で「作者が父を呼んだら、父が応へず母が応えた」と云はれた。「父を呼べば母の応へる刈田かな」では。どちらにしても心もちのよい作品。(喜孝)

九年母落つ立入禁止の内側に

篠田 純子

家のすぐ近くの河の堤の柿の木が今年も鈴なりだ。橋のすぐ袂の堤に生えているのに、河に沿って金網の柵があり、その内側なので収穫される事もなく、鴉が突ついて後は風にさらされ河に落ちてしまう。持ち主のない柿の実を、田舎育ちの私はいつも勿体ない思いで眺めている。この句もそんな思いの作者かなと思ひ、「くすつ」としてしまいました。しかし、何度も読んでいくうちに、「立入禁止」という句が気になってきました。私には九年母はちゃんと収穫するために植えられているのだらうと思えるの

に、なぜ立入禁止の内側で落ちているのだろうか？ひょっとして、これは原発事故によって立入禁止になった地域の情景ではないかと思えてきて、切なくなりました。九年母が福島でも育つのか疑問ですが、九年母に限らず、同じように収穫されずに立入禁止の内側で落ちてしまった果物を想像すると、まだ避難生活が続いている人達を思つて胸が痛みます。（裕子）

宝くじ売場の向かひ鰻焼く 定梶じょう

宝籤は買つても当たらないが買はなければもつと当たらないとよく笑ひあふ。数寄屋橋の宝籤売場の行列の長さは夙に有名である。この夢を売る売場の向かひで鰻を焼いてゐるといふ。作者、この場の設定にふとをかしみを覚えたのではないのだろうか。

（喜孝）

小雨のち曇りのち晴運動会

須賀敏子

運動会で一番気になるのは、何と言つてもお天気のこと。厄介なのは、朝のうち晴れていたのに、運動会が始まつてから降り出す雨。いつそ、朝早くから雨が降つていた（それも激しく）方が、中止や延期を決められて諦めもつくというもの。この句は、幸いな事に、その逆。いずれ止むと予想のつく小雨から、曇りになって晴れる。なんとラッキーな運動会。子供も

あをキーワード俳句辞典（こえーこえ）

声

先生の声は空色冬日和
 星あかりやもりの声の鳴きやまず
 花八ツ手雀の声のにぎはしく
 電話の声の主を探す子春隣
 毛糸編む訪ふ声に目がこぼれ
 北窓を開けて隣の声若し
 鴉声真似れば応ふ彼岸墓地
 深淵に墜ちゆく如し螻蛄の声
 電話より山頂の声毛糸玉
 鶉の鳴く声透る大寒気
 濁声の猫擦り寄りぬえびね蘭
 向日葵や声にならざる声洩らす
 瑞牆山邯鄲は師の声ならむ
 わが声にわれのおどろく冬の居間
 春一番反戦の声届けてよ
 夫婦して句座に声あり扇風機

芝 尚子
 吉成美代子
 関口 ゆき
 江倉 京子
 鎌倉喜久恵
 東 亜 未
 松本 米子
 定梶じよう
 森 理和
 早崎 泰江
 篠田 純子
 竹内 弘子
 堀内 一郎
 田中 藤穂
 須賀 敏子
 後藤 志づ

沼一円朝焼けて藻の声となる
 母の声電話ですます盆帰り
 街中や鶯の声つゝぬけて
 春の燈や高き声洩る博奕宿
 古女房声も出さずに油虫
 をうをうと声高まりし弥生の木
 肥こえ
 痩せ大根足りない物は肥か愛か
 湯の里の女出て来て寒肥す
 いちぢくに寒肥さびしければやる
 小枝
 寒茜小枝にかかる天使の絵
 竹節虫は小枝のごとし秋の昼
 さるすべり小枝そよがせ咲く仕度
 やうやくに小枝装ふ冬木の芽
 細引に括りし小枝芽吹きそむ
 忘れぬやう小枝を折りし山眠る
 古幹に生ふる小枝の花ゆたか

渡邊 友七
 斉藤 裕子
 山莊 慶子
 井上 石動
 大日向幸江
 吉弘 恭子
 須賀 敏子
 篠田 純子
 定梶じよう
 森 理和
 吉成美代子
 藤野 寿子
 鎌倉喜久恵
 竹内 弘子
 大日向幸江
 井上 石動

武藏野が驛の後架に二十日月 佐藤喜孝

引き籠りめく一日に鵲くる 田中藤穂

墓参若い家族の微笑まし 長崎桂子

山山の合唱付きの蝉時雨 森理和

祝宴に祖父母の四人水引草 赤座典子

豆菊とよばれし人の秋扇 秋川泉

夕菅や鳥は寝ぐらへ吾は街へ 井上石動

『沉淪』の碑暮るる醉芙蓉 王岩



穴まどひ増水の川流れゆく	大日向幸江
父呼べば母が応へる刈田かな	斉藤裕子
漣にあづく夕焼の赤とあを	佐藤恭子
ぬっと出た黒猫草虱だらけ	篠田純子
宝くじ売場の向かひ鰻焼く	定梶じょう
小雨のち曇りのち晴運動会	須賀敏子
数珠玉のるり色を濃く隠岐島	竹内弘子
手を借りて浮き栈橋の花火かな	佐藤恭子

喜孝 抄



まい

比来披見

馬酔木 11月号

嘉門次の鉄瓶たぎるそぞろ寒

京鹿子 11月号

秋扇渋々矛を収めたる

春燈 11月号

苦瓜を大事に育て市民たり

峰 11月号

糠雨に家の灯滲みる冬の暮

風土 11月号

稲の花たましひ一つ一つかな

ホトトギス 11月号

朴落葉卓に華やぐものとして

集めても所詮落葉は風のもの

雨月 11月号

音一つ立てず進むや風の盆

六花 11月号

田の端に豆殻を焚く奥丹波

万象 11月号

髪刈つて夾竹桃の白仰ぐ

空 11月号

寝ころんでみるには痛き花野かな

徳田千鶴子

鈴鹿 呂仁

安立 公彦

布川 直幸

神蔵 器

稲畑廣太郎

稲畑 汀子

大橋 暁

山田 六甲

大坪 景章

柴田佐知子



槐 11月号

阿波踊はて存分に生きたるや

故障したやうにきちきちばった飛ぶ

鳴 11月号

烏爪引張つてみる誰も来ず

白玉や嫂とうに真の姉

沖 11月号

濤声を呼ぶ大鷹の渡りかな

やぶれ傘 八十六号号

蚯蚓鳴く道を近江へくだりけり

未黒野 11月号

野の川に鍬の漬けられ涼新た

人形舎雑纂

世界見る動態視力 天の川

アンゴラにお為ごかしの猫じやらし

かの日夏遺骨抱きし白木綿

向日葵を担いで帰る死者の丘

人魂に張り付いてゐる青紅葉

嗚呼昭和紅茶きのこや猛し

漠然の穴に日当る七日かな

オイデプス水蜜桃を丸囓り

高橋 将夫

井上 信子

高橋 道子

能村 研三

大崎 紀夫

松本三千夫

高橋 龍

比来披見

スサオヲに胸乳吸はするアマテラス

藤は実に主語斥ける述語かな

マグリット三日月墮胎す木を蒼く

萱 12月号

青北風や燈台遠く灯をかざす

としよりの日といふわけのわからぬ日

秋風や手を付く丈に百度石

十六夜や牛車が家の前に来る

燭

足利長林寺

立春大吉礎にしみつく落葉の香

耕耘機土いきいきと滞なせる

川魚料理稲刈る中に門構

でんと立つ一升徳利茸山

木村 嘉男

亀田虎童子

小島 良子

々

瀧 春一

佐藤喜孝



毎月25日発売
定価1200円(税込)

俳句界

月刊

2016年 1月号

別冊 投稿俳句界 一流選者29名!
日本一充実の投句欄

対談
佐高信の目線で「こころ」
菅直人 (政治家)

●お邪魔します 書齋訪問 橋本榮治「樞」
松田ひろむ 「鷗座」

※セレクトシン結社「吟遊」夏石番矢
発表! 第6回北斗賞 坂井諒一

投稿欄選者新春競詠
有馬朗人 稲畑康太郎 今瀬剛一 大串章
角川春樹 岸本マチ子 古賀雪江 坂口緑志 佐藤麻積
鈴木しげき 夏石番矢 西池冬扇 原和子 山田佳乃
大高霧海 高橋将夫 田島和生 田中陽 中西夕紀
名和未知男 能村研三 石井いさお 五島高資
佐久間慧子 堀本裕樹 朝妻力 山尾玉藻

特別作品51句 辻桃子
岸原清行 阪田昭風 佐久間慧子

ラビエ **俳句界NOW 小原啄葉**

特集 蛇笏と龍太
○グラビア 蛇笏と龍太の山河
○巻頭エッセイ 飯田秀實
○蛇笏・龍太50句 ○蛇笏・龍太年譜
○インタビュー 浅井一志 ○蛇笏・龍太論
○エッセイ 廣瀬町子 井上康明 ほか
○「雲母」百年の系譜「雲母」から生まれた俳人達

※一部変更の可能性あります。

株式会社 文藝の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

俳境流連

生牡蠣にレモンを添へて若やぎぬ 幸江

岩ガキを初めて食べたのは、鳥取だ、うーん岩ガキが好きになった。鳥取では日本海の海水で育った岩ガキを七個食べた。

関東に来て、バスツアーに三陸訪問の広告が踊っている。三陸は海の幸だ、決っている。バスは早朝出発、昼前には三陸に着いた。広告には岩ガキ食べ放題、そんな言葉に舞い上がっていたら、それは突然だった。一時間に一〇〇mm程の冷たい雨がバスを叩く。カキ、カキ、岩ガキが目の前に有るのに、雨はもっと激しい、バスガイドさんが頭を下げて、生岩ガキは激しい雨のため店には来てないです。無情な一言。昼食は温かいカキ料理です。

残念、無念!!

枯木立関節筋肉ゆるぎなし

桂子

暦も小寒大寒ともなれば、近くの桜並木もすっかり葉を落し裸木の並木に変わり果てます。

植樹されてから二・三年のか細い若木、何十年間も美しく咲き誇り、今では幹は凸凹しおまけに大きな穴のある老木。

そんな並木の中に、壮年期を思わせる樹々は、見上げる程に丈は伸び、四方に枝を広げている様子は、筋骨隆々とでも言いますか、がっしりしています。その逞しい姿を暫くは楽しみながら歩きます。

寒晴や芽吹まちたる大櫓

石動

八世紀初までの「日本古代史」が好きだ。

東京へまでは無理だが、山梨のそれらに関する「シンポジウム」などは、可能な限り聴きに行く。

4世紀の倭国（日本）は、中国の史書に全く出現しない。「空白の4世紀」と呼ばれている。最も不明で、最も連想が湧く世紀だ。そんな世紀に架かる頃の時代と言われているのが、「甲斐・鉾子塚古墳」。

甲府市の南端、甲斐の古墳銀座の地に在る。東日本で五指に入る大きさの前方後円墳。或る日、機会得て訪問。少々の高台に位置し、南アルプス連峰（蛇笏の連山）、八ヶ岳、奥秩父連山、そして甲府市を一望できる地。整備された古墳の後円部の頂上に一本の大樫が聳えていた。その樫・古墳の主と、こ半刻会話した。

補足になりますが、あの卑弥呼が後ろ盾にしたのが魏（曹操）国。魏国から「鏡百枚」を貰った、まさにその時代に、魏と敵対する呉国（孫堅）の年号入りの鏡が、この古墳の地続きの地から出土してい

る。日本に2枚しかない呉国年号入り鏡（上野・国立博物館蔵・重文）。

私の妄想は邪馬台国へまで、広がるのでありました。

手を合わす刻長くなり寒椿

裕子

仏壇の花の水を変え、お供えのご飯とお茶お水をあげ、手を合わせるのが毎朝の日課。この句を詠んだ頃は、色々心配事を抱えていたのだと思います。「おはようございます。」に続けて、いつも沢山の願い事ばかりを心の中で唱えていました。願いが叶うと報告とお礼の言葉も唱えます。手を合わせる時間も長くなり、忙しい気持ちになる事もしばしばでした。

自分が癌になった時から、私の毎朝のお参りは変わってきました。お願いするだけのお参りを止めたのです。お願いするのは「今日一日が良い一日で

ありますように。」それだけ。後に続けるのは「自分の目標に向かって挫ける事なく進んで行きます。困難を乗り越え頑張って行きます。どうぞ見守って下さい。宜しくお願いします。皆様、お安らかに。」と。自分の意志を伝えるようにしたのです。癌の手術をしてから丸三年、転移再発して癌剤治療を続ける現在、不安で打ちひしがれそうになる事も度々ですが、以前より手短かになった言葉を唱えながら、自分を励ますように手を合わせ、一日を始めるようにしている毎日です。癌だとは言え、生きていられる事は楽しい。心からそう思います。

花柁脳の隙間に咲いてゐる

純子

私自身、これからの年金問題と共に、老人性痴呆症について心配している。父方には呆けた人は殆どいないが、母が勢いよく呆けた。怖ろしいことに、

母の脳には隙間があった。

そんな頃、吟行で柁の花をはじめて見た。白くてふんわり優しい花を、花が大好きな母に、見せたいと思った。

先日、NHKで、痴呆ちよつと前の症状についての講釈があった。早足で歩くのが良いとのこと。肉より魚と野菜を食べよと。銀ブラもこれからは、早足かと思うと味気ない。寂聴さんも日野原さんもステーキを食べているではないか。

情報が多すぎるのだ。

呆けてもいい。病気になってもいい。脳に隙間が出来たら、ふわふわと花柁の気分であれば良いのよ。と母は言っているようだ。

冬日向缶ぼつくりに沿しや

じょう

その子は、父が外国航路の船員さんであり、母親

は保母さんでしたから、祖父母の世話を受けて育ったのでした。父親が帰国の際、土産に持って帰ったハムの缶詰（これが実においしいのですが）、少し大ぶりのその空き缶を、祖父が紐をつけて缶ぽっくに仕立てたのでした。

勿論今時そんなものを見ること絶えてないのですが、おそろおそろ乗っていた子が上手になって、通りすがりの大人たちからほめそやされると、随分遠くまで歩くようになったのでした。

祖母が幼い頃、そんな缶ぽっくりで足を挫いた兄弟がいたそうで、つきつきりでついて歩くのが、ほえましく見えたのでした。

田舎の冬日は塞くものがありません。誰にもあまねくあたたかいのですが、殊にこの子にはそうでしたらう。

八月十五日ほつとなで肩怒り肩 恭子

女の人の和服姿は好きである。何故かわからない、好きなものは好きとしか言えない。

会社勤めを十年した。その間に、好きな着物を結構作った。今も躰がついたままの着物が、箆笥の中に眠っている。勿体ないと他人は言うかもしれないが、私は満足。先日タンスの中を開けてみた。ちよつと手にとつてみたがやつぱり絹の感触はなんとも言えず心地よい。ぴったつと肌に吸い付くように……。やはり着物を着るにはなで肩でなくてはならないと。テレビの俳優さんも、折角の着物が怒り肩では見た目には綺麗じゃない残念ながら。

この句とは全然関係がない文になってしまった。それぞれの過ごした戦時期によつて八月十五日は感慨は違ふと思う。戦が終わつたという瞬間大きな息を吸つたことだろう。それぞれの思いが普段気にすることがあまりない肩に現れた。その想いを引きずつてきているかもしれない。それにつけても戦争は駄目。いかなる理由があろうとも、憲法の解釈変

更とは学校で習った国語にはありえない話。素晴らしい憲法に誇りをもつて残りの短い人生生きていきたいとこの頃とくに思っている。

コンビニの灯も恋しくなり秋の雨 裕子

今程沢山のコンビニがなかった頃。ちよつと一人で遠出すると、秋の日はあつという間に暮れ、家へと急ぐ気持ちは忙しく、辺りが暗いと心細くさえなってくる。雨が降っていたりすると尚更の事。灯りというのは有難いものである。帰っていく我家の灯りは勿論だが、道々の家々についている灯りも、温もりを感じさせてほつとする。コンビニができ始めた頃は、今では当たり前になった24時間営業に批判的な気持ちもあったが、遅くなって帰る暗い道中、灯りのついたコンビニはとても有難く思えた。冷たい秋の雨がその気持ちに拍車をかけたのだ。

と思つた。

母瑠河夜長高島茂算術す 喜孝

先生の銭かぞへある霜夜かな 寺田寅彦

といふ句を読んだ。調べると、東大理学部の高島先生は妻を亡くしたばかりで生活のためにお金を数へてゐるところの自画像ださうだ。寅彦先生金勘定あまり好みではなささう。瀧先生にも

敬老金もらひてひとりどぜう屋に

がある。どぜうで一杯呑もうといふ先生らしい一句。

掲句は瀧先生の『暖流』同人、高島茂を詠んだものの。「ボルガ」が仕舞ごろになると独特の記号で埋め尽された紙から今日の売上げをと算盤をはじく。この句、茂さんを詠んだ句のなかでは好きな句である。寅彦の句からふと思ひ出したことである。

行く春を母は算術してをりぬ 斎藤嘉久

はしたて集

定梶じょう選

篠田 純子

上品な興奮銀木犀を過ぐ

「興奮」という単語に「上品な」の語を上接した措辞は、もしかしたら純子さんを嚆矢とするかもしれません。面白い。

雨小止み鐘の鳴るまで昼の虫

烏瓜の縞の在る時小糠雨

なるほど、熟する前は確かに縞がある。でも、それを詠んだ句は



余り目にしたことはありません。「小糠雨」も効いています。

五感ほぼ使い切りたり末枯れ蟲

ほぼ使い切るといことは、まだ余力が残っているわけです。五感を尽くして鳴きおさめん、と。

長崎 桂子

秋の雨細波し川底見ゆる

秋霖の桜雲に濡れそぼつ

休止するところが欲しい。「秋霖の桜に雲濡れそぼつ」、と。

秋澄むや親睦兼ねる奉仕の日

こちち良い風の流れや草紅葉

秋川 泉

たおやかな女の髪に櫛紅葉

律の風詔かざる客訪れり

掲句、私は初め、「律の風」は「葎の風」のことでしょうか、として『あを』へ送稿したのでした。すぐ喜孝さんから指摘頂いて、「律の風」の語のあることを知ったのでした。生兵法。



調べたことを少し説明しますと、「旋律」などの辞があるように、もともと「律」は音楽に関する用語。「律呂」と並べて、音階のこと。日本では「呂」を陽、「律」を陰、とするそうである。要するに長調と短調でしようか。「呂」を春、「律」を秋としてとらえた。

「律の調（しらべ）」とは秋の気配のことであり、「律の風」とは秋風のこと。「『律』は秋を掌る」と、大きな歳時記には説明してありました。無知を泉さんにお詫びしなければなりません。なるほど、秋風の中嫌な客がきたもんだ、と。佳句です。

しかし今はそのことではなく「訪れり」のこと。助動詞「り」は、四段動詞にしか付かないのが古代から約束。

「訪れる（訪る）」の語は下一段（下一段）に活用する（訪れず・訪れて・訪るる）ことばです。から「り」は接続しません。接続するのは、否定の詞「ない」をくつつけてみて、その動詞が「ア行」で終る時。

「咲かない」↓「咲けり」、「話さない」↓「話せり」、「読まない」↓「読めり」等々。「起きない」「食べない」「訪れない」等は「イ行」「工行」で終わっていますので、「り」が付かないわけです。へ他に、サ変の動詞には付きませんが。）

あやしくも夕日を受けし死人花



泣き顔の君に届ける栗ごはん

七郎衛門吉保

阿久悠は何と詩ふか秋大雨
雨上りフォルテに変わる夜の虫

「フォルテに変わる」は、「雨上り」で充分に声を高めたこと分ります
ので、「雨上りフォルテツシモに夜の虫」とすれば。

小糠雨ビエンナールの案山子かな
合羽着て声出し「反対」秋微雨

森 理和

銀杏に大粒小粒鎮守かな
彼岸花畦に一台軽トラック

俳句は結句に重心を置くことの多い文芸ですから、「彼岸花」を座
五に据えたい。「軽トラック畦に一台彼岸花」。

メトロ口出て大き一息秋の空
急転回色づきはじむ紅葉かな

「急転回」は、紅葉が急である、あるいは海拔が増して紅葉が急に



なったということでしょうか。「色づきはじむ」は説明。そして「紅葉」に掛かるわけですから「色づきはじむる」が正しいことに。ここは「急転回胸つき坂の紅葉かな」などと。

須賀 敏子

東京へ席譲られて秋深む

「深む」という詞はややこしい。学校で教わる古文で「深む」は「深める」の意味しか説明されていませんし、この句で「秋深む」は、「秋が深まる」の意ですから古文の上では「秋深む」は間違い、ということになり兼ねない。しかし現代の国語辞書には殆んど、「深む」を「深まる」と「深める」の両方で説明しています。ですから、古語としては「秋が深まる」の意では遣えないが、現代語では遣っていい、ことになるわけです。学校文法しか知らない俳人は平気で「秋が深む」は誤り、なぞという。言葉が変わるものであることを知らないか、知っていても信用しない。

渋柿の撓何時もの山路かな

秋黄蝶一羽のみにて昨日今日

今朝もまた向じ葉陰に大蟬螂



田中 藤穂

虫の夜の音量上げて「未完成」
川海老の空揚げに塩ぬくめ酒
無患子を踏むや真黒き球生まれ
薄生けて影の生まれし豊かな
しつとりしていい句ですが、私なら「薄生け影の生まるる」としたい。

佐藤 恭子

蒙古斑いまだ消さずに八月過ぐ
「八月過ぐ」が面白いが、蒙古斑は消すものではない筈。「消えずに」でしょうか。童子の裸。

病む人はひとりかそれとも終戦日

この句も、中七「ひとりか」の「か」は不要。

八月のワイングラスや雨漏りす
金網を出ろでろ夏の草いろいろ

赤座 典子

古往今来スーパームーン幾度か



この天体現象は四十億年以上前からあるわけで、「古往今来」は誇大ではない。ということなら、「幾度か」が冗語。座五を外す工夫を。例えば「今日見たり」とか。

夕映えにツンと上向く秋薔薇

自問自答 鬼皮厚き 利平栗

「利平栗」、どんな栗なんでしょう。「鬼皮厚き」とありますから充分想像できます。堅固な皮を鎧うた「利平栗」がその内部で自問自答しているようだ、と。面白い。

若者の迷彩服や冬隣

斉藤 裕子

故郷は黄金色なり秋の旅

赤まんま母は無口になってきた

楽しいに父語る母赤まんま

大きな字で短い日記赤まんま

裕子さん、口語遣いをめざしていらっしやるのかもしれませんがそうでないなら、「大きな字の短い日記」とする方が句が落ちつきます。



大日向幸江

球形になりて崩れる組体操

口語「崩れる」を遣つてらつしゃいますので、「球形になつて」の方が統一感が出ます。

天高く今日の地球のご機嫌は

「天高し」と言い切りたい。

音もせず目にも見えぬや秋の雨

「目にも見えぬ」は俳句の言葉遣いとしてまずい。「音もせず見えぬ」でいいわけですから。その空いた処に地名などを入れて、例えば「音もせず見えぬ草加の秋の雨」

愛嬌を色に出しけり箒草

佐藤 喜孝

樹の下 の 街燈がつく雲の峰

つぎつぎに蟬を詰めこむ一軒家

海は山を山は海見て月が出る

わが国では、言わば山と海が対なつて存在していて、海が山をみれば必ずしも海を見ているものだ、と。深さと高さが対立でも従属でも



なく対^つになつてゐるのだ、と。そこへ、月の出。日本の夕べ。面白い。
東京の生れながら晩年を父母の故郷の石川県で過ごし、そこで亡く
なつた細川加賀に

阿波の鳶淡路の鳶に恋をせり

があつて、喜孝さんと句柄は異なるけれど、どこかあい通ずるところ
があるのです。しかし喜孝さん句は沈着。そのことはひとへに結句「月
が出る」にかかつてゐる。冷静でなかつたら、この飛躍は生れない。

梅雨穴がペキンにもまたソウルにも
春愁を水族館にみてきたる





あとがき

十一月十九日「朝日新聞」の「ひと」欄に王岩先生が紹介された。わたしこの新聞を取ってゐなかったが「あを」の複数の人から、電話・メールで知った。慌ててコンビニに走った。見も知らぬ人からなぜかわたしに電話があり『漢訳与謝蕪村俳句集』を求めたいと云ふこともあった。中国の人民文学出版社から66円で発行されてゐる。欲しい人は編集部が王岩先生に連絡下さい。日本の古典俳句が中国のひとにどう受けとめられるか楽しみなことである。「ひと」欄は「俳句が中国の人たちに届いて欲しいと願う。」と結んでゐる。

(喜孝)

二〇一五年十二月号

発行日

十二月六日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・松村美智子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替

00130・6・55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

